中国英傑伝

海音寺潮五郎

作者

海音寺潮五郎　明治三十四（一九〇一）年～昭和五十二（一九七七）年。小説家。作家。鹿児島県の生まれ。國學院大学卒業後、中学の国語教師を務めるかたわら創作に専念。歴史の真実を伝える「史伝文学」の復興者として知られる。

その主な代表作品と受賞歴は以下のようになる。

一九二九年　「うたかた草紙」。「サンデー毎日」大衆文芸賞入選。
一九三二年　「風雲」。「サンデー毎日」大衆文芸賞受賞。
一九三六年　「天正女合戦」「武道伝来記」他で第三回直木三十五賞受賞。
一九五三～一九五四年　「蒙古来る」
一九五四～一九五七年　「平将門」。大衆小説から歴史小説に脱皮。
一九五九～一九六一年　「二本の銀杏」
一九五九～一九六三年　「武将列伝」
一九六〇～一九六二年　「天と地と」
一九六一～一九六二年　「悪人列伝」
一九六一～一九六三年　「西郷隆盛」
一九六八年　第十六回菊池寛賞受賞。
一九七一年　「中国英傑伝」
一九七三年　第二十四回ＮＨＫ放送文化賞受賞。
一九七三年　文化功労者
一九七七年　第三十三回日本芸術院賞文芸部門受賞。
（以上、「現代作家辞典」東京堂出版・一九七八年。「日本近代文学大事典」講談社・一九八四年よりまとめる。）

海音寺潮五郎

海音寺を語るとき、「一九七三年文化功労者」の受賞理由に、「歴史文学の発展と普及につくすとともに、史伝の復活に貢献したことが評価される。」とあり、この中にある「史伝の復活」（＝「史伝」というジャンルの文学を復興させた作家ということ）という言葉に注目しなければなるまい。ここで言う「史伝」とは、歴史伝記として伝えられる記録の総称を指す。

海音寺自身も「史伝文学の再興とオーソドックスな歴史小説の育つべき土壌を培養することを意図して書いたものです。」（海音寺潮五郎全集　第十七巻武将列伝下・朝日新聞・あとがき）と、「史伝文学」の再興に執筆意図があることを述べている。また、「史伝文学」についても、「文章列伝が、最初に書いた六人を一冊にしてはじめて出版されたとき（　略　）ある知名な作家が、『よく努力して資料を集められているが、勝負はこれからだ、これをどう文学化するかが問題だ。』と、書いたのがありました。評者はこれはまだ文学ではないと考えていたわけです。たぶん、評者の考えている文学とは小説だけなんでしょう。私は苦笑せずにはいられませんでした。日本人の文学観から史伝というジャン

ルは長い間忘れられていたのですね。」（同前）と語り、「史伝」が文学のジャンルの中にあると強調する。つまり、海音寺は「史伝」は文学のジャンルの中にあるから「史伝文学」だとした。もう少し言うなら、海音寺の言う「史伝」とは、歴史の真実を伝えるため広範かつ詳細な文献調査などをもとに虚構を排した歴史の真実とはどのようであったかを明らかにしようとするもので、その「史伝」を読み物風に平易に読めるものにしたところに、海音寺の「史伝文学」の特色があるということになろう。

また、海音寺が中国の「史伝」「史伝文学」を書く意図やどのように書いたかについても、次のように語っている。

「日本の文化は中国文化の影響を最も濃厚に受けていますので、ある程度中国の歴史事実や、人物のことや、思想家達の思想や、故事成語の知識がなければ、日本の古典を読む場合はもちろんのこと、日常の会話にすらさしつかえるのです。……この戦後日本の学校教育の欠漏を補うために書こう。おもしろく、平易に読めて、史伝文学であるとともに、知らず知らずの間に中国史の知識や故事成語の知識が得られるように書こう。」（「中国英傑伝」あとがき）と。意義深い言葉だ。

出典

「中国英傑伝」〔昭和四十六（一九七一）年、文藝春秋〕によった。教科書に収録するに際して、漢字・送りがな・句読点などについては教科書として統一した体裁に改めた。

「中国英傑伝」とは、海音寺が「十八史略」をもとに、「呉越春秋」などの多くの史書を用いて、春秋戦国時代から前漢成立までに登場する種々の個性豊かな人物を描いた史伝である。

参考文献

❊**教師用**

「中国五千年（上・下）」（講談社文庫）陳舜臣　平元

「物語　中国の歴史－文明史的序説」（中公新書）寺田隆信　平九

中国の通史が分かりやすくまとめられているだけでなく、歴史の中に登場する人物たちの、欲望、生き様、生きる目的にも言及する良書である。

❊**生徒用**

「改訂版中国小史　黄河の水」（角川文庫）鳥山喜一　昭三十五

著者は、「少年子女のために、漢民族の歴史をつづったもの」と書いているように、逸話や伝承・伝記などを用いながらやさしく語りかける。

❊**教師・生徒共通**

▽「十八史略」や「史記」など中国の史書をベースにした小説

「伍子胥」（徳間文庫）伴野朗　平十七

復讐に捧げた伍子胥の生涯を、孫武、呂飛など魅力的な脇役とともに描く。

「晏子（一～四）」（新潮文庫）宮城谷昌光　平九

生き方や政治のあり方、補佐役としての在り方など、学べる点が数多くある作品。これは、「晏子春秋」をもとに再

現した。

「重耳（上・中・下）」（講談社文庫）宮城谷昌光　　平八

上巻では、春秋の五覇の代表格とされる晋の文公（重耳）の祖父称の晋の統一が描かれ、中巻では、重耳の父が描かれ、下巻では、重耳の長い流浪時代を含めた、その生涯が描かれる。

「管仲（上・下）」（文春文庫）宮城谷昌光　　平十八

管仲の前半生の苦難と後半生の成功の日々が描かれる。

「呉越春秋　湖底の城（一～九）」（講談社文庫）宮城谷昌光　　平二十五

伍子胥、呉王夫差、越王句践、范蠡の生涯を描く。傑出した人物のストーリーは読みごたえ十分。大作。

「小説十八史略（一～六）」（講談社文庫）陳舜臣　　平四

「范蠡ー越王句践の名参謀」（ＰＨＰ文庫）立石優　　平十二

傑出した軍才と優れた政治手腕で、越王句践を補佐した范蠡。その稀有な人生が描かれる。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 作者について理解する。［知技⑵イ］

❶教科書所収の作者紹介項目を用いて、「史伝文学の復興者」であることを確認するとともに、海音寺の「史伝文学」はどのようなものかを解説する。「作者」に詳しい。要点は、「史伝」＝歴史の真実を伝えるため、広範かつ詳細な文献調査などをもとに、虚構を排した歴史の真実とはどのようであったかを明らかにしようとするもの。海音寺の「史伝文学」＝「史伝」を読み物風に平易に読めるものにした。

【評価】 本文の作者・出典及び、「臥薪嘗胆」と本文の関係を理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶ 本文の黙読をする。
❷ 第一次感想をノートにまとめ、その後、発表する。
❸ 内容読解をする。［思判表B⑴ア・イ・エ］**［「学習のポイント」1］**

❶読めない語句については、辞書などで調べるよう指示する。
❷第一感想は、五十字程度の短い感想でよい。ノートに書かせて言語化させる。
❸次の**ア〜オ**のポイントに注意する。**ア**「同じこと」とは、具体的にどのようなことかをグループで話し合い、代表が発表する。

イ（　）内の書き下し文を現代語訳し、朗読する。**ウ**板書した現代語訳について、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。その返答の仕方も工夫する。**エ**（　）内の書き下し文を、その意味を考えながら、グループ内で朗読し合う。**オ**「ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。」とあるが、どのようなことを「思い知る」かを漢文教材「臥薪嘗胆」をもとに、グループで話し合い、代表が発表する。

ア…「『拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。』（P一四四・下3〜5）、また、リード文を参考に。」という助言を与える。

イ…「瀬下」「俱に」「胡馬は北風を望みて立ち」「越燕は日に

向かひて熙ぶ」「誰か…ざらんや。」などの語句や句形に注意させ、意味が通じやすいように現代語訳を工夫させる。

ウ…他グループの質問や意見に対する返答を十分に検討させることは、生徒たちの考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。

エ…朗読は、音の高低や強弱など工夫させる。

オ…ここは披離が子胥に助言する場面。この助言と「思い知る」内容を漢文教材「臥薪嘗胆」とを関連させて説明させる。

【評価】・それぞれの読解のポイントについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

・本文に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめているか、確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶ 伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っているかをグループで話し合いながら本文に即してまとめ、発表する。思判表B(1)イ 主態 **〔「学習のポイント」2〕**

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸ 本文の意味を考えながら、グループ内で朗読する。

❹ 第二次感想をノートにまとめ、発表する。

❶伍子胥の伯嚭に対する思いは、「学習のポイント」2より、理解させられよう。ここで、大事なのは「共感」という言葉に生徒が気付くかどうかであろう。そのためには「『理解している』でもよいが、理解だけで官職に推薦するだろうか。『子胥は承服せず、益々親しみ』（P一四五・13）とあるように、伍子胥は伯嚭に対して、『完全なる信頼心』を持っていた。そこで『理解』より、強い気持ちを表す言葉はないか。」という助言を与える。

【評価】・披離が子胥に助言する場面で、この助言と「思い知る」内容を漢文教材「臥薪嘗胆」と関連させて理解しているか、確認する。

・「臥薪嘗胆」との関係を踏まえ、伍子胥が伯嚭に対してどのような思いを持っていたか、と「披離の忠告はあたっていたのだ。」という本文の言葉についてどのように思うか、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見に対する返答を十分に検討させることは、自分たちの考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そ

こで「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という確認をさせておく必要があろう。

❸大きな声で各文の意味を考えながら、グループ内で朗読させる。

❹第二次感想は、百字程度の感想を書かせる。ノートに書かせて言語化させる。第一次感想より教材への理解が深まっているか、確認したい。

発問例

●一四四ページ

問　**「子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし」（上7行目）とあるが、どのような境遇か。**

答　伍子胥も伯嚭も、楚に親族を殺され、国を追われて呉に亡命した客臣で、楚に復讐したいと考えているという境遇。

補　「拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。」（下3～5行目）とある。この文では「…立場…境遇…」となっているが、「立場」は「その人の置かれている地位や境遇」のことなので、「立場」＝「境遇」として、解答を導いた。「客臣」とは、使者として来た外国の臣下。

問　**「胡馬」（下12行目）は、なぜ「北風にいななく」のか。**

答　北方の異民族の地に生まれた馬は、他国にいて北風が吹いてくると、頭をあげてその方に身を寄せてなつかしむ。転じて、故郷を忘れないたとえ。

補　漢和辞典などの「胡馬依北風」（文選・古詩十九首）の項目に詳しい。

問　**「越鳥」（下13行目）は、なぜ「南風に向かひて巣くふ」のか。**

答　南の越から来た鳥は、南方にある故国を慕って南の方の枝に巣を構える。転じて、故郷を忘れないたとえ。

補　漢和辞典などの「越鳥巣南枝」（文選・古詩十九首）の項目に詳しい。

問　**「同じこと」（下15行目）とは、具体的にどのようなことをいうか。**

答　**補**　「学習のポイント」**1**(1)参照。

問　**（　　）内の書き下し文（一四四ページ下16行目～一四五ページ上4行目）を現代語訳せよ。**

答　**補**　「学習のポイント」**1**(2)参照。

●一四五ページ

問　**「ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。」（上16～17行目）とあるが、どのようなことを「思い知る」のか。漢文教材「臥薪嘗胆」と比べながら具体的な説明をせよ。**

答　伍子胥は、披離の助言を否定したことが、自分の「非」であった（自分が不明であった）と思い知る。

補　伯嚭は、伍子胥から信頼を得て大夫に推薦されたのにも関わらず、敵方の越から賄賂を受け取ったり、権力を手に入れようと呉王夫差に伍子胥の讒言をしたりした。その伯嚭の人柄を見抜いていたのが披離であった。そこで、披離は、伍子胥に「伯嚭に注意する」よう助言する。ところが、披離の助言を否定してしまうのだ。その判断ミス

語句の研究

●一四四ページ

上1伍子胥　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「伍員」参照。

上1闔廬　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「闔廬」参照。

上2伯嚭　「臥薪嘗胆」の「語句の研究」「伯嚭」参照。

下3～5拙者は楚に父と兄とを…ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。　伍子胥と伯嚭の「同じこと」の整理。「発問例」**問**「子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし」とあるが、どのような境遇かに詳しい。「学習のポイント」**1**(1)参照。

上12披離　呉の太夫。未詳。

下12胡馬　北方の胡の国に産した馬。「胡」は、秦・前漢以前は、匈奴をいう。北狄とも。

下13越鳥　南方の越の国の鳥。「越」は、春秋時代の十二列国の一つ。当時の「越」は江蘇・浙江省、山東省の一部を領有していた。

下16同病相憐れみ、…　「呉越春秋」闔閭内伝の、一節の書き下し文。ここは、「呉越

が、自らを自害に追い込むことになる。

問 **伍子胥は伯嚭に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめよ。**

答 **補** 「学習のポイント」**2** 参照。

春秋」（「欽定四庫全書」呉越春秋巻二闔閭内伝による）に基づき、その書き下し文となっている。「参考」参照。

下16驚翔　驚いて飛び立つ。「翔」は、鳥が空高く飛ぶ。

●一四五ページ

上2熙　楽しむ。好む。

上6憮然と　がっかりしたさま。暗く沈むさま。子胥が伯嚭の正体を知らずに高い地位に引き上げ登用することにがっかりした。

上15呉越春秋　呉と越、二国の興亡史。「春秋」とは、歴史の意味。「呉越春秋」、十巻。編年体。前半（一～五巻）が呉、後半（六～十巻）が越の歴史。その記述の中心は、呉＝闔閭・夫差。越＝勾践となる。巻は1呉太伯伝、2呉王寿夢伝、3王僚使公子光伝、4闔閭内伝、5夫差内伝、6越王無余外伝、7勾践入臣外伝、8勾践帰国外伝、9勾践陰謀外伝、10勾践伐呉外伝、となっている。

参考

Ⅰ「呉越春秋」との比べ読み

海音寺は、中国物を書く際、「十八史略」をもとに「春秋左氏伝」「史記」「国語」や「呉越春秋」などの多くの史書を用いて登場人物の事績や人物像を掘り出して書いたと言われる。確かに、この教材文の中に「呉越春秋は伝えている。」（P一四五・上15）と書かれているのも、その証左となる。

そこで、「呉越春秋」にある記述を読み、「中国英傑伝」の記述と比べ読みをし、「中国英傑伝」に対する理解をより深める活動も可能である。

［本文］

呉大夫披離承レ宴問二子胥一曰、「何見而信レ喜。」子胥曰、「吾之怨与喜同。子不レ聞二河上歌一乎。『同病相憐、同憂相救。驚翔之鳥、相随而集。瀬下之水、因復倶流。』胡馬望二北風一而立、越鷹向レ日而熙。誰不レ愛二其所一レ近、不レ悲二其所一レ思者乎。」披離曰、「君之言外也、豈有二内レ意以決疑一乎。」子胥曰、「吾不レ見也。」披離曰、「吾観二喜之為一レ人、鷹視虎歩、専レ功擅レ殺之性、不レ可レ親也。」子胥不レ然二其言一。与レ之倶事二呉王一。

［書き下し文］

呉の大夫・披離は宴を承りしとき子胥に問ひて曰はく、「何を見て喜を信ずるか。」と。子胥曰はく、「吾の怨と喜とは同じうす。子河上の歌を聞かざるか。『同病相憐れみ、同憂相救ふ。驚翔の鳥は、相随ひて集ふ。瀬下の水は、因りて復た倶に流る。』胡馬は北風に望みて立ち、越鷹は日に向かひて熙ぶ。誰が其の近き所を愛せざらんや、其の思ふ所の者を悲しまざらんや。」披離曰はく、「君の言外や、豈に意を内れて以つて決して疑ふこと有るらんや。」子胥曰はく、「吾見えざるなり。」披離曰はく、「吾喜の人と為りを観て、鷹の視虎の歩み、功を専らにし殺を擅にする性は、親しむべからざるなり。」子胥其の言を然りとせず。之と倶に呉王に事ふ。（「欽定四庫全書」呉越春秋巻二闔閭内伝闔閭元年）

［現代語訳］

呉の大夫・披離は宴会に招かれ、子胥に質問していった、「どういうところを見て喜（伯嚭のこと）を信じたのか。」と。子胥はいった、「私の（楚に対する）怨み（うらみ＝かたき）は喜の怨みと同じだ。あなたは、河上の歌をお聞きになったことはないか。『同じ病のものはお互い憐れみ、同じ憂いを持ったものはお互い助け合う。驚いて飛び立った鳥は互いにしたがい集まり、瀬の水は勢いを盛り返してともに流れる。』胡地の馬は（故郷の）北風を望んで立ち、越地の燕はいつも（南の）太陽に向かって嬉々としている。誰でもその近い関係の人を愛さないものはいないし、その思う人を哀れまないものはいないのではないか。」と。披離はいった、「あなたの言葉はうわべだけのことです。内心何か思うところがあって心配事を否定しようとされているのではないか。」子胥がいった、「私には何も心配事などありません。」披離がいった、「私は喜という人を観察しましたが、鷹のような鋭い目を持ち、虎のようなたけだけしい歩き方をし、功を独り占めにし、人をほしいままに殺す性格があります。近づいてはいけない。」子胥は披離の言葉に同意せず、伯嚭と一緒に呉王に仕えた。

（現代語訳は東洋文庫８７３「呉越春秋」呉越興亡の歴史物語・平凡社・佐藤武敏訳注より。）

Ⅱ「小説十八史略」ー臥薪嘗胆ー

陳舜臣氏は「十八史略」を小説化するにあたり、自身の膨大な中国史、中国文学に関する知識を総動員し、全六巻（毎日新聞社発行。その後、講談社文庫発行）という大著に仕上げた。一日に一つ、エピソードを読むだけでも中国史の勉強になる。挿入されたエピソードには、中国史の多様さと人間感情の複雑さがよく表れ、「読んで楽しい」小説となっている。そこで、ここに「臥薪嘗胆」の話の全てを掲載できないので、参考までにその一部を引用する。「臥薪嘗胆」教材と読み比べをしてみよう。

だが、江南の文化人である夫差は、そんな徹底した愛憎の念をもたない。彼は家臣の伍子胥の復讐にかけた執念を、

――どろどろしすぎている――と、不快に思うこともあった。

『史記』や『春秋左伝』にはのっていないが、『十八史略』には、夫差が父の怨みを忘れないために、ふわふわしたベッドで寝ないで、ごつごつした薪のうえに横たわった、と記している。これが有名な、

――臥薪――である。

これは一見、復讐心の強さをあらわすようだが、じつはそうではない。薪のうえに横になるような、そんな無理をしなければ、怨みを忘れかける。――執念の弱さを物語るエピソードと解せないこともない。

伍子胥はそんな方法を用いないでも、復讐心が弱まることはなかった。

ここに呉王夫差とその家臣伍子胥の違いがあり、それが二人を悲劇に導いたのである。

夫差は物心のついたころから王の子であった。しかも、王の後継者として、人びとに認められていた。父の闔閭のように、「王位を奪ってくれよう」と、長いあいだはげしい闘志を燃やすこともなかった。おっとりと育ったのである。

だから、夫差はこれまで、どろどろした怨念のかたまりのような伍子胥を、心のなかで毛嫌いしていた。ところが、父の最期の言葉によって、彼も怨念の人の仲間入りをすることになった。

呉王夫差と伍子胥のあいだが、最もうまく行ったのは、夫差が越にたいする復讐の念を燃やした三年間だといってよい。

夫差は約束どおり三年目に越を破った。

（「小説十八史略一」講談社文庫・陳舜臣　P二〇三・2～P二〇四・5）